

幼児の談話語にみられる発話の種類

田 中 瑩 一*

Eiichi TANAKA

On the Types of Expressions in Children's Utterance

0 はじめに

幼児の話し言葉に関しては、語彙についても構文についてもかなりの先行研究をみることができる。しかしそこで扱われている資料の中には、異った場や条件のもとで採取されたものが混在している場合もあり、資料として必ずしも均一でないために、観察結果が十分話し言葉の指導に生かしきれないうらみがある。たとえば、成人が誘導して幼児に話をさせる場ではかなり複雑な構文がみられても、同じ幼児が他の幼児と自由に会話している場ではそのような構文がみられにくいという現象がある。^{注(1)}又、幼児同志の会話にあらわれる文と、いわゆる「ひとりごと」にあらわれる文との間にも、構造その他に相違があるという観察もある。^{注(2)}幼児語の研究にあたっては、その言葉の発せられた場を十分考慮する必要があると考えられる。本稿で考察対象としたのは、いわゆる「ひとりごと」や、成人が誘導してひき出した言葉ではなく、幼児同志の会話を傍受して得たものである。これをここでは「幼児の談話語」と呼ぶことにする。

幼児の談話語を観察してみると、同一の場においてもしばしば、表現上の性質を異にすると考えられる言葉が入りまじって使われていることに気づく。一例をあげれば次のようである。

ままごと遊びにおける幼児の会話

Y 8歳女 小学3年生（「姉」の役）

N 6歳女 幼稚園児（「母」の役）

M 4歳女 （「妹」の役）

M わたしだってしていい？ ねえ、お母さん。

N だめですよ。これはね、あぶないからね。これは花火じゃないからね。火がね、あつーいのよ。

M ふーん。

N だからやめなさいね。

M はあい。

N 何でも言うこと聞きなあで。お姉さんの言うことも。少しね、あすこの幼稚園で遊んでいらっしゃい。

M はあい。

Y ここが井戸だよ。ね、このさん、もう四つだけんね。すぐ帰るのよ。

M はあい。

Y 気をつけてね。

M はあい。

（中略）

M ただ今。ただ今、お母さん。

N 静かにしちよってね。台所の方で遊んでない。こっからね、こっちは台所でね、こっからへやだけん。台所の方で遊んでて。

M きょう、お姉さん休みだで、学校。

N うん。

M 姉さん今ね、ふとん買いに行きなつたで。

N うん。まだ、お昼から出らんなんで。

M うん。（1971年松江市にて採取）

ここには、母（N）、姉（Y）、妹（M）それぞれの役割を演ずる言葉、いわば架空の世界に没入した言葉の間に、下線を施したような言葉が混在している。下線部はその架空の世界をつくるための約束をとりかわす言葉であって、これらの言葉が発せられるに際しては、幼児たちは現実の世界にもどっていると考えなければならない。同じMが、役割演技の際には「はあい」と言う言葉で答え、遊びの約束をとりかわす際には「うん」と言う言葉で答えている。この使い分けにうかがえるように、ここには表現上の性格を異にする少くとも二種の言葉を認めることができる。本稿で「発話の種類」と呼ぶのは話しことばをこのような観点から観察して得られる

* 島根大学教育学部国語教育研究室

ものである。幼児の言語生活の様々な場において、どのような種類の発話がどのように分布し、そのことに、指導上どのような問題が含まれているかということをも明らかにして行く必要がある。

本稿では、幼稚園における「役割遊び」と「絵本鑑賞」の場で採取した幼児の談話語について幾つかの発話の類型を見出し、その分布を検討しながら各類型の特性、言語指導上の問題点等を考察する。なお各類型ごとに構文や語彙に差のあることが予想されるが、ここではその問題は扱わない。

1 「役割遊び」にみられる発話の類型

1・1 考察資料

資料A 「ねことかめ」ごっこにおける幼児の発話

時間10分間 参加幼児数 男5名女3名

資料B 森の動物ごっこにおける幼児の発話

時間10分間 参加幼児数 男5名女3名

対象児 松江市立忌部幼稚園園児

あか組 4・5歳児(担任 立脇美晴教諭)

資料採取日 1976年2月12日

資料採取の方法と資料の特徴 対象児を、前年4月入園以来の保育を通じての観察を手がかりに、言語的反応の傾向がおおむね均等になるようにA、B二群に分けた。1976年1月20日以来二、三日おきに絵本「いたずらこねこ」(バーナディン・クック文/レミイ・チャーリップ絵/まさきりこ訳 福音館書店1975年刊第27刷)を、A群には原文によって、B群にはあらずし説明風に改作した文章によって、くりかえし7回読み聞かせ、当日、第7回めの読み聞かせが終了したのち、各群の幼児をねことかめになって遊ぶように誘導した。各群の遊びにおける発話を、二幼児に装着した二基のワイヤレスマイクと、集音マイク一基によって録音し、それを文字化して考察資料とした。以下A群の録音を文字化したものを資料A、B群の録音を文字化したものを資料Bと呼ぶ。聞きとれない発話もあって、資料は完全であるとは言えないが、幼児の発話の概要をとらえるにはそれほど不都合はないと考えている。A群は絵本の内容をなぞる遊びに熱中し、傍流の遊びとしては、途中、ねことねずみの追っかけごっこに移った二女児が認められただけであった。B群ははじめおよそ一分ほどはねことかめになって遊んでいたけれども、やがて男児はライオンやチーターなど、森の動物になっての遊びに移り、女児は遊びからはずれて行った。ここでは各群の主流の遊び(各10分間)における発話に限って考察する。

1・2 発話の類型

両資料にみられる幼児の発話には次のような類型を認めることができる。

I 約束設定の発話

遊びのルールや役割演技上の条件を述べる発話である。この中を、発話の意味内容をも考慮して、さらに次のように下位区分することができる。

(1) 自己の役割宣言

自分が何の役割を担当し演ずるかと言うことを遊びのメンバーに知らせるためのもので、次のようなものが含まれる。

「ぼくお池ちゃん」「かめでござるぞ」(資料A)「おれうさぎ」「おれガイコツだよ」「ほんならぼくチーターだよ」「チーターの兄弟だよ」(資料B)など。

「役の割りふり」の相談にもとづいて宣言する場合もあれば、一方的に宣言する場合もある。

(2) 人物の設定

遊びに登場する人物の特徴や互いの関係を述べるもので、次のようなものが含まれる。

「チーターはね、トラと仲良しになっちゃうけんね」(資料B)など。

(3) 役割りふり

誰がどの役を担当するか、幼児同志相談をするもので、次のようなものが含まれる。

「あんたかめになれ」(資料A)「おまえライオンになったらいいわや。ライオンになったらいいで」「ほんならぼくはね、何になる?」(資料B)など。

(4) 行動のルール

演技の実行にともなう約束ごとをとりきめるもので、次のようなものが含まれる。

「おれが出る番だぞ」「ここから出たらいいけんよ、かめは」(資料A)「シマウマならそんなとできんわや」「立ってね、さっと行ってよ。ぼくも行くけん。追いかけて行くけん」(資料B)など。

(5) 場の設定

遊びの展開される環境をとりきめるもので、次のようなものが含まれる。

「どうなってるの?」「そこ壁だよ」「あすこがかめのうち」(資料A)など。

以上のうち(1)(2)(3)は遊びの登場人物に関するもので、(4)(5)は遊びの実行に関するものである。

II 演技描写の発話

自分の演技行動の意味を説明したり、その演技に

よってあらわされる状況を説明する発話である。この中をさらに次のように下位区分することができる。

(6) 行動描写

「ねこが池に入った」「かぎ閉めとくぞ」「足をこんど出しはじめた」(資料A) (他の幼児をつかまえて)「チーターの赤ちゃんつかまえてしまったで」(ゆっくり走りながら)「いきおいがないもん、少しは」(資料B) など。

(7) 状況描写

(かめになっている幼児のうしろに、自分もかめになって続き)「かめの行列」(資料A)「チーターの赤ちゃんがおうちでおる」(資料B) など

(8) 擬声語による描写

(かめになって歩きながら)「トコリトコリトコリ」(資料A) など。

(9) 演技の伴奏としての歌

「かめかめかめさんかめちゃんよ」「ポッポポッポスッポッポ」(資料A) (動物になって走りながら)「逃げろや逃げろや大レース」(資料B) など。

これらは、架空の世界に入っている本人が、自分の肉体で演じ切れない部分を言葉で説明したものであって、いわば架空の世界の演出者、物語作者の立場に立って発せられたものと解釈される。この点にこの類型の発話の表現上の特性がある。

III 役割演技の発話

遊びに登場する人物になりきってする発話である。この中をさらに次のように下位区分することができる。

(10) 会話

「どうぞお入りください」「ねこ、あっちへ行けえ」(資料A)
「こら、チーターのじゃまするな」「はなせはなせ」(資料B) など。

(11) 心理の表現

「かめさん来らんかな」(資料A) など。

(12) 鳴声、叫び

「ニャンニャン」「ウウンウワー」(資料A)
「ワオーワオー」「チューチュー」(資料B) など。

これら「役割演技の発話」は前章でままごと遊びの例について、「架空の世界に没入した言葉」と説明したものに相当する。

以上、上記資料にみられる幼児の発話について、表現上の性質という観点から三つの類型をみいだした。この内「約束設定の発話」は現実の立場から発せられたものであるが、「演技描写の発話」及び「役割演技の発話」は遊びの中に観念的に構成された架空の世界に立場を移して発せられたものと解釈される。このような発話の類型は上記資料に限らず、広く「役割遊び」一般に共通して認められるものと考えられる。各類型の下位区分にあたっては発話の意味内容を考慮した。指導上の具体的な問題点を考察するために有効であろうと考えたからである。

1・3 各類型の分布とその意義

上記各類型の分布を両資料についてまとめると第1表の通りである。(発話量は文数であらわした。)

第1表

	資料A	資料B
I 約束設定の発話		
(1) 自己の役割宣言	18 (22.5)	49 (55.7)
(2) 人物の設定	0 (0)	18 (20.5)
(3) 役割の割り振り	11 (13.7)	9 (10.2)
(4) 行動のルール	20 (25.0)	12 (13.6)
(5) 場の設定	31 (38.8)	0 (0)
小 計	80 [54.4]	88 [72.1]
II 演技描写の発話		
(6) 行動描写	20 (55.6)	7 (63.6)
(7) 状況描写	3 (8.3)	3 (27.3)
(8) 擬声語による描写	7 (19.4)	0 (0)
(9) 演技の伴奏としての歌	6 (16.7)	1 (9.1)
小 計	36 [24.5]	11 [9.0]
III 役割演技の発話		
(10) 会話	20 (69.0)	11 (47.8)
(11) 心理の表現	6 (20.7)	0 (0)
(12) 鳴声、叫び	3 (10.3)	12 (52.2)
小 計	29 [19.7]	23 [18.9]
不 明	2	0
全 体	147	122

〔 〕内は全体に対する百分比

()内は各類小計に対する百分比

「約束設定の発話」は資料Aに少なく資料Bに多い。A群の幼児は、絵本「いたずらこねこ」の洗練された原文をくりかえし読み聞かせられていたために、メンバー全員にねこことかめの物語のイメージが鮮明にとらえられて

注⁽⁵⁾
いたと考えられる。そのイメージの延長上にA群の遊びは展開された。そのため「約束設定」のための発話はB群より少なくすみ、もっぱら遊びの内容をふくらますことに力がそそがれたものと考えられる。一方B群の遊びは、メンバーに共通理解の乏しい主題で展開されたので「約束設定」のために多くの言葉を費す必要があったものと考えられる。「約束設定の発話」の内容をみると、「人物の設定」が資料Aにみられない。これはA群の幼児が事前に絵本によってイメージを十分与えられた人物をこの遊びに用いたためにこの種類の発話が不要であったものと考えられる。そうして資料Aでは「約束設定」の発話の過半数が「場の設定」や「行動のルール」など遊びの実行に関するもので占められている。これに対して資料Bでは「自己の役割宣言」や「人物の設定」「役割の割り振り」など、人物に関するとりきめの発話が86%を占めている。ことに「場の設定」の発話が一例もないということは、遊びの舞台が抽象的にしかとらえられていなかったことを示すものと考えられる。

次に「演技描写の発話」は資料Bに非常に少ない。先にも述べたようにこの種類の発話は演技行動によってはあらわしきれない種類の、様々な状況を言葉で描写するものであって、演技の機微に属することがらが多いと考えられる。B群の遊びにこの種類の発話が少ないことは、B群の遊びがA群の遊びにくらべて、内容的に貧しいものであったことをうかがわせる。

次に「役割演技の発話」の内容をみると、資料Aには「会話」や「心理表現」が多いのに、資料Bにはそれが少なく、過半数が「鳴声、叫び」であることが目につく。B群の遊びは動物になって叫んだり走りまわったりすることを中心としたものであって、動物同志がかかわり合って一つのドラマを構成するという域にまでは達しなかったものと考えられる。

以上、両資料における発話の種類の分布を比較しながら、各種類の意義を考察した。これによって同時に、「役割遊び」の評価ならびに指導上の着眼点の幾つかを明らかにすることができたと思える。

2 「絵本鑑賞」にみられる発話の種類

2・1 考察資料

とりあげた絵本

A “じのないえほん” ディック・ブルーナ絵（福音館書店1973年刊第11刷）

B “les aventures d'une petite bulle rouge”
Iela Mari 絵（l'école des loisirs 1970年刊）

両者ともに文章は付されていないが、順を追ってペー

ジをめくると、あるストーリーを読みとることができるように構成されている。Aは、子どもが道を歩いたり歯みがきをしたり、食事をしたり、シャワーを浴びたりする話であって、幼児の日常の生活経験そのまま素材となっており、画面から画面への展開もだいたい常識的である。Bは子どもの吹いた赤い玉が、風船になり、リングになり、蝶になり、花になり、最後には傘になってしまふというように、全く空想的な内容の話であり、画面から画面への展開も飛躍に満ちている。

対象児 島根大学教育学部附属幼稚園児

I ゆり組 3・4歳児<以下年少児と略称>

16名（担任 越野梅香教諭）

II うめ組 4・5歳児<以下年中児と略称>

34名（担任 玄田初栄教諭）

III ほし組 5・6歳児<以下年長児と略称>

34名（担任 永島千恵教諭）

資料採取日等 資料採取日、時間、発話量（文数）は第2表の通りであった。

第2表

対象児	絵本		A	B
	資料採取日等			
(年少児)	資料採取日		1973年7月4日	1973年7月3日
	時間		10分	8分
	発話量		164文	136文
(年中児)	資料採取日		1973年7月18日	1973年7月18日
	時間		14分	16分
	発話量		199文	227文
(年長児)	資料採取日		1973年10月1日	1973年7月19日
	時間		20分	19分
	発話量		236文	315文

資料採取の方法と資料の特徴 各クラスの幼児を担任教師のまわりに座らせて上記絵本を教師が提示し、画面を順次めくって行きながら各画面に対する印象を幼児に自由に話させた。その際教師は幼児の発話の反復確認をする程度にとどめ、積極的に発話や観察をリードすることをしないように努めた。しかし指導は各クラス担任に依託したので、若干の扱い方の差はまぬがれなかった。幼児の発話を集団の中央においた一台のテープレコーダーの内蔵マイクによって録音し、それを文字化して考察資料とした。録音の他筆記による発話の記録も一部試みたが、幼児の発話を余すところなく完全に採取することは困難であった。しかし集団全体に対して影響力を持つ程度に明瞭な発話は中央のテープレコーダーにも収録されているので、ここでは録音の再生によって弁別で

きる範囲をその集団の発話とみなした。なお挙手をして指名を求める「ハイ、ハイ」という声や、席の奪い合いの声など、絵本への反応と無関係な発話は資料から除外した。

2・2 発話の種類

各資料にみられる幼児の発話には次のような類型を認めることができる。

- 1 反応型の発話(絵本の画面に対して反応した発話)
 - 1) 没入型の発話(絵本の画面に没入した発話)
 - 2) 解放型の発話(絵本の画面から解放された発話)
 - ア) 連想型の発話(絵本の画面をみて連想した現実の体験を述べる発話)
 - イ) 批評型の発話(絵本の画面や他の幼児の発話を批評する発話)
- 2 進行型の発話(絵本鑑賞の進行に関する発話)
 - 1) 集団的進行型の発話(集団の絵本鑑賞の進行に関する発話)
 - 2) 個人的進行型の発話(絵本鑑賞進行上の個人的な要求を述べる発話)

以下、例をあげながら解説を加える。各例の所在を末尾の()内に、I、II、III(対象クラスの別)とA、B(絵本の別)で示す。

没入型の発話

例1 「すごい。大きくなって来た」(III・B)

例2 「こ、こけこっこう」「かっこう」「ああさが来たよう」(I・A)

例1は赤い風船が大きくなった絵をみておどろいた気持を表わしている発話であり、例2は鶏の絵をみて、その鶏になりきって鳴き声をたてたり、呼びかけたりしている発話である。このように現実の世界を脱して絵本という別次元の世界の住人となったところで発せられた発話を「没入型の発話」と呼ぶ。この型の発話は、幼児たちがその絵本画面にひきつけられている時にあらわれるものであり、感動が幼児たちを沈黙させるという場合を除けば、この型の発話の存在は幼児たちが絵本世界に読みひたっている模様を示唆するものと評価することができる。

連想型の発話

例3 「あのね、学校に行くところ」「きょうは日曜日だから遊びに出たんだ」^(a)「お散歩に行くところ」^(b)「あ。きょうは月曜日だった」(III・A)

例4 「歯みがきしてる」「何色?」「ちえちゃんも歯みがき」「まみちゃんも」「しんちゃんも」<中略>「スーパーで買ったんだ」「青、青」「ぼくもスーパーで買ったんよ」(I・A)

例3の下線部(a)と(b)とをくらべてみると、(a)は絵本の中の主人公が家から出かけて行くその場に立ち合って、その絵本の中の架空の日を「きょう」と表現した「没入型の発話」であるが、(b)はこの絵本鑑賞の行われた現実の日(1973年10月1日)が月曜日であったことに思いあたって「きょう」と表現したのである。例4では冒頭の「歯みがきしてる」は「没入型の発話」であるが、「何色?」以下すべてその絵本の画面から離れて、幼児たちは各自の現実の歯みがきの行為や歯ブラシの色について述べ合っている。次いで「スーパーで買ったんだ」になるとさらに歯ブラシを購入した折のことに連想が展開して行っている。このように、絵本画面の素材や印象がきっかけではあっても、そこから離れて現実の生活経験の回想を述べる発話を「連想型の発話」と呼ぶ。

絵本には、その中で幼児たちが現実生活を再認し、現実に関する一つの秩序を獲得するという効用もあり、そのような作用を特に期待して制作されたいわゆる再認絵本などの鑑賞に際してはこの型の発話が多いものと考えられる。又、いわゆる物語絵本の鑑賞においても幼い読者がしばしば現実の回想に帰ることを喜ぶ^{注(6)}ということは経験的にも知られているところである。

批評型の発話

例5 「あ。学校に出る」「おうちを出たところ」「学校じゃない。カバンがないぞう」(III・A)

例6 「風船じゃないよ。太陽だよ」「風船だよ」「風船なんか空に飛ばないよ」(III・B)

例5の下線部は、「学校じゃない」という発話の根拠を画面から探し出して理由づけようとするものであって、画面から一步退いてそれに批評的に対峙する姿勢がみられる。例6の下線部も、幼児の思考はいったん画面を離れ、風船の一般的性質に関する自己の知見を援用して主張の論拠を示そうとしている。このように、絵本の世界に批評的に対峙する立場からの発話を「批評型の発話」と呼ぶ。この型の発話には現実世界と絵本世界との対峙的な把握が前提となるので、年齢的に高い集団に多くみられるものと考えられる。

「連想型の発話」と「批評型の発話」とは、ともに絵本の画面から離れる性格を持つ点で共通し、「没入型の発話」と対立する。そこで、この相違点をとりたてて考える必要がある場合、「連想型の発話」と「批評型の発話」^{注(7)}とをあわせて「解放型の発話」と呼ぶ。

進行型の発話

例7 「あのね、学校へ行くからね、着かえてからね、朝ごはん食べる。学校へ行くもん」^(a)「これおまえと同じだがな」^(b)「もう一回言ったことは

いけないよ」^(c)「そんなこと言ったらつまらんじやーん」[じゃ はぐっていいですか]「いいよ」^(d)

(Ⅲ・A) []内は教師の発話。

この例で下線部(a)(b)(c)の発話はそれらの前の「学校へ行くからね、……朝ごはん食べる。」という発話があり、先になされた他の幼児の発話の反復であることをとらえて、そういう発話を制止しようとしたものである。つまり、集団の絵本鑑賞進行上のルールについて述べたものである。このようなものを「集団的進行型の発話」と呼ぶ。この型の発話は社会的な配慮がある程度成熟したところにみられるものと考えられる。集団内の他のメンバーの発話を自己の絵本鑑賞にとり入れて生かして行こうという姿勢が育っているために、それを妨害するような発話を批難、制止するための発話とみられるのである。もっとも社会的な配慮がさらに成熟して、集団での絵本鑑賞のルールに違反する、脱線や反復の発話があらわれないほど洗練されて来れば、当然この発話も不要となる。

下線部(d)は進行上の個人的な都合を述べる発話である。このようなものを「個人的進行型の発話」と呼ぶ。上記(d)は教師の問いかけに答える受身的なものであるが、他に幼児から教師に「早くめくって」と依頼する発話や、逆に「まだめくらないで」と、めくることをおしとどめる発話もみられる。これらは前者にくらべ、幼児の方にイニシアチブのある積極的な発話であって、この発話の多い集団では、絵本鑑賞が幼児主導型にすすめられているものと考えられる。

2・3 各種類の分布とその意義

前節で考察した各種類のうち、幼児の絵本鑑賞の質と深いかかりを持っている発話は「反応型の発話」とあると考えられる。そこでこの節では、「反応型の発話」の中に含まれる「没入型」「連想型」「批評型」各々が各

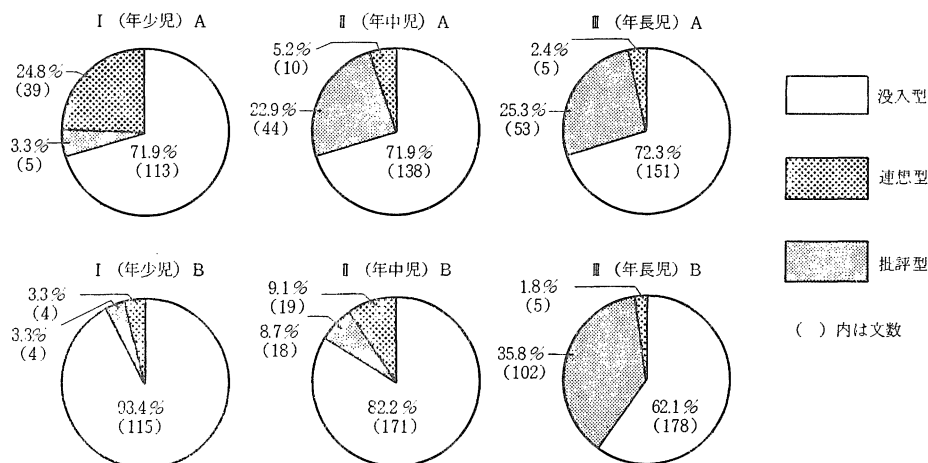
資料にどのように分布するかを考察しながら、幼児の絵本鑑賞指導上の問題点について考えてみたい。上記各資料について各種類の分布をまとめると第1図の通りである。

この図を手がかりに次のようなことが考えられる。

まず「没入型の発話」の分布をみると、絵本Aに対する発話では、各年齢の間でその分布に差がないけれども、絵本Bに対する発話では、年齢が低いほどこのタイプの占める割合が多くなっている。 χ^2 検定の結果では年長児と年中児・年少児との間に1%、年中児と年少児との間に5%以下の危険率で有意差を認めることができる。又、年少児及び年中児については、絵本Aに対する発話よりも、絵本Bに対する発話の方にこのタイプの分布が多いことも、1%以下の危険率で認めることができる。年長児については有意な差が認められない。先に考察した「没入型の発話」の性質を考慮すると、絵本Bは、年齢の低い幼児に対して、より制約的に働きかけたものとみることができる。いわばこの年齢の幼児たちは、絵本Bの画面にふりまわされ、一歩つき離してこれを見るというような余裕はなかったものと推測される。この点から考えると、現実ばなれのした空想的な素材を扱っている絵本Bは、この年齢の幼児にとって十分よみなすことができなかつたのではないかと疑われる。これに対して年長児では、絵本Bも絵本Aと同じように受け入れることができたものと考えられる。

次に「解放型の発話」をみると、絵本Aの場合、年少児には「連想型の発話」が多いのに対して、年中児・年長児では反対に「批評型の発話」が多くなっていることが注目される。年少児にはこの絵本は、生活経験の再認とその語りあいをうながすように働きかけたものと考えられる。年中児・年長児ではそのような、いわば脱線と

第1図



もみなされるような発話はほとんどみられなくなって、かわりに批評的な対し方が伸びて来るもの^{注(6)}のようである。絵本Bの場合、年少児・年中児では、先に述べたように「解放型の発話」自体が少ないけれども、年長児になると絵本Aと変らない程度にこの類型の発話があらわれ、しかもその大部分が「批評型の発話」である。年長児はこの空想的な画面を現実の世界に対比してとらえなおし、安定した位置づけを試みようとしたものと解釈することができる。

以上、各資料における発話の類型の分布を比較しながら、各類型の意義を考察した。これによって同時に、「絵本鑑賞」の評価ならびに指導上の着眼点の幾つかを明らかにすることができたと考える。

3 おわりに

以上、幼児の談話語にみられる発話の類型を、幼稚園における「役割遊び」と「絵本鑑賞」の場で採取した資料をもとに考察して来た。おわりに前二章で異なる資料によって別個にたてて来た類型相互の関係について考察する。

1でみいだした三つの類型のうち「約束設定の発話」は現実の立場に立って発せられるという特徴があった。これと性質を同じくするものを2の諸類型に求めれば、「解放型の発話」及び「進行型の発話」であろう。このうち後者は集団で絵本をみるという、幼稚園の保育の場における特殊な鑑賞形態によるものであって、絵本に対する幼児の一般的な発話であるということではできない。

1でみいだした残りの二類型、即ち「演技描写の発話」及び「役割演技の発話」はともに観念的に構成された架空の世界、いわば観念的場^{注(7)}に立って発せられるという特徴があった。これと性質を同じくするものを2の諸類型に求めれば「没入型の発話」である。ところで1でいう「役割演技の発話」は架空の世界に入った自分が、その世界の人物になりきって、その人物の立場で発話するものであり、「演技描写の発話」は架空の人物の立場から一度、いわば演出者の立場に身をひるがえしてこれをみる立場から発せられるものであった。このような区別は2の「没入型の発話」に認められないのであろうか。結論から言えばそれはやはり認められると言うべきであろう。2の例2「こ、こけこっこう」「かっこう」「ああさが来たよう」は明らかに「役割演技の発話」と言っている。又、2の例1は「演技描写」と呼ぶにはむりがあるが、絵本の世界に没入していかにも絵本の主人公になりきっての発話ではない。絵本の世界に存在する素材に、その世界で立ち合っている、いわば物語作者の立場

に立った発話である。この意味で1の「演技描写の発話」と表現上の性質が共通しているとみることができ。本稿のよった資料にはこの型の発話がまれであって、2で一類型をたてるのには疑問があった。いま、1でみいだした諸類型との関係を考慮して反省してみると、この型の発話が少なかったのは、ここで用いたA、B二冊の絵本の素材が影響しているのではないかと考えられる。他の絵本についてさらに調査を重ねれば、幼児の「絵本鑑賞」一般の発話の類型としてこの型を特立する必要が出てくるように考えられる。

注

(1) 大久保愛「幼児の文構造の発達——3歳～6歳児の場合——」（国立国語研究所1973年刊）にもこの旨の指摘があり、その研究が、成人が誘導して幼児に話をさせた場で得られた資料によっているため、幼児同志の会話にはみられない整った文形式を扱っていること、伝達機能の面の調査としては幼児同志の会話についての観察が必要であることを付言している（同書p5, p249）。なお注(2)の研究もこの現象にふれている。

(2) 伊藤香苗、杉山悦子、中村より子、真庭加代子「幼年期の談話語に関する研究」（島根大学教育学部卒業研究1976年提出）

(3) 大久保愛「幼児のことば」（国土社1969年刊）はリュブリンスカヤが幼児のひとりごとに「遊びことば」と「問いことば」の二種類を認めていることを紹介し、この類型を我が国の幼児のひとりごとの観察に適用すると、両型のひとりごとの間に構文や語彙の差が認められることを例示している。（同書p114～118）

(4) この実験の経過と考察は1976年8月9日、日本読書学会第20回研究大会（於東京都）で「物語絵本の受容に関する一考察——文章表現の相違が幼児の反応に及ぼす影響について——」という標題のもとに筆者が報告した。ここではその実験で得た資料の一部について別の観点から考察を加える。

(5) このことについては注(4)に記した拙論で考察した。

(6) いわゆる「物語絵本」の鑑賞の際にみられる幼児の「連想型の発話」の分布については注(4)に記した拙論で考察した。

(7) 没入型の発話と解放型の発話との間に構文上の傾向に差が認められることについては、拙論「幼稚園児の絵本に対する反応の言葉」（1974年5月25日 表現学会口頭発表於松山市）で論じた。

(8) 同じ絵本について小学1・2年生に同じ実験を試みたところ、小学1・2年生では「連想型の発話」は一例もみることができなかった。（対象児＝松江市立城北小学校児童。資料採取日＝1974年10月3, 5, 7, 9日）

（1976年9月10日稿）

〔付記〕考察資料の採取にあたってご協力たまわった、松江市立忌部幼稚園及び島根大学教育学部附属幼稚園ご当局、ならびに関係諸先生にあつく御礼申しあげる。